

歴史の教訓と異言語教育¹

大谷 泰照

異文化接触の最も悲惨な形態としての戦争の体験から、人類はどのような教訓を汲み取り、それをどのように未来に活かすのか。戦後の3大経済圏の日本、アメリカ、EUは、その点では明確に異なる3様の姿をみせる。

1. 3度の戦争とヨーロッパ人

ヨーロッパを訪れるたびに痛感させられることは、ヨーロッパには戦争の傷跡が日本よりもはるかに色濃く残っているということである。ヨーロッパ人の心の中に戦争の傷跡が深く刻まれているということである。たとえば、オックスフォードでもケンブリッジでも、イートンでもハーローでも、戦没者の追悼碑や戦争の記念碑が必ず目につく。ウェストミンスター寺院でも大英博物館でも、ロンドンの街角でも地方都市の公園でも同様である。

もちろん、戦禍をとどめる建造物の跡はいたるところにある。コベントリーでは、ナチスによって破壊された教会をそのままに残して、その横に新しい教会ができています。ドーバーでもリバプールでも同様である。戦争の悲惨さを、できるだけありのままに後世に伝えようとしている。

フランスでも、たとえば南フランスのオラドゥール村は、村全体がナチスによって破壊しつくされ、村人のほとんど全員が婦女子に至るまでも殺害された。フランス人は、戦後もその村を復旧することなく、惨劇の跡をそのままの姿で保存しようとしている。執念深いとも言えるが、その戦禍を後世にまで伝えようという意志の強さには圧倒される。

戦勝国だけではない。敗戦国のドイツでも、旧東ドイツはもちろん、旧西ドイツでも同様の光景を見かける。ベルリンの目抜き通りのカイザー・ヴィルヘルム教会は、半壊して真っ黒に焼けただれた教会をそのままに残して、その横に対照的に新しい教会を建てている。ハンブルクのザンクト・ニコライ教会も、戦火で崩れたままの生々しい姿

¹ 本稿は、大谷泰照編集代表『EUの言語教育政策－日本の外国語教育への示唆』（くろしお出版、2010）の拙稿「まとめ」を敷衍して、大幅に書き改めたものである。

で永久保存されている。そしてドイツの敗戦時に廃墟と化した街の模様を示すパネル写真が、いまでも人目につく場所に掲げられている。

ひるがえって、わが日本はどうか。たしかに日本にも、広島と長崎には原爆の惨禍の跡が残され、慰霊碑が建てられている。しかし、それ以外に、たとえば東京の、あるいは大阪の、そして名古屋の、一体どこにあの戦争の悲惨さを後世に伝えるよすがとなるものが残されているか。これに比べると、ヨーロッパには、たしかに戦争の傷跡は非常に色濃く残っている。それはただ単に建造物だけではなく、戦後のヨーロッパ人の生き方の中に残っていると考えることができる。

第二次世界大戦が、戦後のわれわれに遺した最大の教訓の一つは、戦争の再発を防ぐためには、人間の相互理解、言い換えれば、異文化理解の地道な努力を続けること以外に方法はないという厳しい反省であったと考えられる。戦争を回避するためには、それ以外の道は考えられない。速効的ではないが、そういう地道な努力を忍耐強く続けるより他には手がないという考え方である。

そのような考え方は、実は様々な場面で具体的な形をとって現れている。たとえば戦後は、戦前とは違って、それぞれの国が、自国の文化の対外広報活動を積極的に行い、国々との相互理解の増進をはかることが、各国のいわば国際的な責任と考えられるようになった。戦前には、大使館の広報部あたりが片手間にやっていたものが、戦後は各国が独立した専門の対外広報機関を設置したり、その活動を強化するようになった。いま世界には、イギリスの対外広報機関のブリティッシュ・カウンスルが 220 か所も置かれている。フランスのアリオン・フランセーズが 223 か所、日本と同じ敗戦国ドイツも、ゲーテ・インスティトゥートを世界の 158 か所にもっている。それらを通して、それぞれの国のありのままの姿を世界の人々に理解してもらおうとつとめている。これらの対外広報機関の積極的な活動は、過去の戦争の痛烈な反省の中から生まれたと言いうことができる。

ところが、日本はどうか。日本は、これらの国々よりも、はるかに国際的な相互理解のための努力が必要な国といえるかもしれない。特に対外貿易についても、戦後処理の問題についても、歴史認識の問題についても、国際的に困難な立場に立たされることが少なくないことを考えれば、日本の立場を十分に説明するための広報機関がとりわけ必要なはずである。ところが、日本の対外広報のための専門機関である日本文化会館は、実は現在、世界中にケルン、ローマ、パリのわずか 3 か所に置かれているに過ぎない。それ以外に日本文化会館よりも小規模の日本文化センターが 7 か所あるが、合わせても、わずかの 10 か所である。世界の「先進国」としては、とても信じ難

い実態である。対外広報、ひいては国際的な相互理解に対するわが国の熱意がいかに希薄であるかをよく示している。

戦後のヨーロッパで、戦争抑止の具体的な努力の結果が最も明瞭に表れたものが EU、すなわちヨーロッパ連合の誕生である。この EU を日本では、アメリカ経済ブロックと日本経済ブロックに対抗するための第 3 の経済ブロックとみる考え方が目立つ。わが外務省のホームページでさえも、EU を「経済的な統合を中心に発展してきた欧州共同体(EC)を基礎に」して出来た組織であると述べている。残念ながら、われわれの国際理解はこの程度なのかもしれない。

そもそも、EU 誕生の由来とは何か。それは 19 世紀後半から 20 世紀前半までの 80 年足らずの間に、ヨーロッパの大国のドイツとフランスが、実に 3 たび戦火を交え、憎みあい、殺し合ったことに由来する。普仏戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦である。戦争によってそれらの国々の国民が多くの命を失い、惨禍に苦しんだだけでなく、その近隣の、特にベネルクス三国はそのたびに大変な被害をこうむり続けた。しかし、彼らがわれわれと大きく違うのは、3 度の戦争の悲惨な歴史を教訓として、それを繰り返さないための明確な意志をもった点である。

その結果、彼らの英知が生み出したのが、1951 年のヨーロッパ石炭鉄鋼共同体 (ECSC) の設立であった。ECSC は一般に、経済産業共同体であるかのように誤解されやすいが、決してそうではない。実は、これはヨーロッパの史上最初の不戦共同体である。これを、われわれは、はっきりと見極めておく必要がある。独・仏間のこれ以上の戦争を不可能にするためには、どうすればよいか。それは戦争に不可欠な資源の石炭と鉄鋼を、独、仏の思うがままにさせないことである。それらの資源をヨーロッパの国々で共同管理をすることによって、ドイツとフランスの 4 度目の対戦を、事実上、物理的にも不可能にしようとするものである。ドイツとフランスの和解、ドイツとフランスの不戦共同体、そしてドイツとフランスの主権の制限、これがヨーロッパ石炭鉄鋼共同体の狙いであった。この ECSC は、その後発展して EEC、EC を経て、現在の EU に成長した。この EU は、現在、加盟 28 か国、24 公用語、人口約 5 億人の統合「大ヨーロッパ」を実現した。これは、疑いもなく悲惨な世界大戦そのものの反省の中から生まれた戦争再発防止のための国際組織である。

この EU は、1992 年の EC の段階で、すでに市場統合を実現している。これは 20 世紀の前半までの尺度では、到底考えも及ばないことである。あれだけ憎みあい、殺しあったかつての不倶戴天の敵国同士が、統合していまや一つの「国」を成そうとしている。とくに EU 中の 19 か国は、長年にわたってそれぞれの国の威信の象徴であり、

いわば各国の「顔」とさえみなされてきたマルクやフランなどの個別通貨を放棄して、ついに共通通貨ユーロの一本化さえ実現した。フランスは、中世以来 600 年も続いた彼らの誇るフランを、EU 実現のためにあえて捨てる決断をした。さらに EU は、憎悪と狂気と破壊の歴史に終止符を打つために、本来ならば到底可能であるはずもない加盟国間の司法の統合から、さらには政治統合までも視野に入れて動いている。いわばヨーロッパ合衆国構想とも言えるものである。これは、人類何千年の歴史の中でも、かつて成し得なかった、いわば壮大な革命的な一大プロジェクトと考えることさえできる。すでに EU 理事会常任議長は、EU を代表する大統領に相当する。

リングア・プログラムは、そのヨーロッパ統合実現のための、いわば必要不可欠な言語教育政策として、1989 年に当時の EC12 か国が全会一致で可決したものである。これは、統合ヨーロッパの全ての市民が、英語を母語とするイギリス人、アイルランド人をも含めて、ハイスクール卒業までに、少なくとも母語以外に、さらに2つの言語を身につけること、いわゆる「母語+2言語」を目指すものである。このような多元的言語文化志向は、従来の単一言語文化志向の、いわば「点の思考」をはるかに超えた「面の思考」と呼ぶことができる。これまた、旧来の発想では考えられもしなかった画期的な言語教育プログラムと言わざるを得ない。

最近では、さも当然のように ‘Victory of English’ などと言われることが多い。いまや英語の時代であり、英語ができなければ 21 世紀は生き残れないと、特に日本では考えられがちである。しかし、少なくとも教育の世界では、英語を唯一のリングア・フランカとはみなさない動きも、また目立って増大しているという事実を見落としてはならない。政治・経済的一極集中とは対照的な、言語・文化的多様性を積極的に認めようとする新しい動きである。それが、たとえばエラスムス計画やソクラテス計画などに支えられて、EU 諸国間では、毎年数十万人の学生・生徒や教員が、国境や言語的境界を越えて、お互いに相手の言語で学び、教えるという大規模な異文化間交流が実現している。母語に加えて、さらに2つの言語を学ぼうとするリングア・プログラムが支持される所以である。いまや、経済的国境が消滅して、国境を越えて自由に通商ができ、自由に移住さえできる EU としては当然のことである。

その EU が鮮明に打ち出しているのが、言語に象徴される多様性こそが EU の文化的価値であるとする強い姿勢である。それぞれの母語を捨てて、一様に英語を学ぶという、たとえばアジアの一部でみられるような状況は一般には考えられない。また、徒に言語や文化の「優秀性」を誇ったり、国相互の序列にこだわるという、いわば縦の尺度ではなく、ヨーロッパの EU は、みなそれぞれに独特の特長をもった言語・文化

の共同体であるという、まさに横並びの尺度を貴重なものと考えようになった。したがって、今日の EU の公用語は、加盟 28 개국で話される合計 24 の言語であって、いわゆる「国際語」の英語でさえも EU の統一公用語にはなり得ない。もっとも、EU の実際の作業言語 (working language) には、たしかに英語やフランス語が使われることが多いことは否定できないが、それでも英語は決して独占的な統一公用語の地位を占めることはできない。

長い間、言語に関しては、発展途上国は先進国のことばを学び、小国は大国のことばを学び、地方は中央のことばを学ぶことが至極当然のことと考えられてきた。「ことばは低きに流れる」と信じて疑われなかった。こんな言語教育的姿勢を、リングア・プログラムははっきりと否定したとみることができる。いまヨーロッパでは、言語は「垂直に上から下へ流れる」ものではなく、むしろ「相互に水平に交流し合う」ものであるという新しい考え方が国際的に、しかも公式に認められたということの意味する。これは、実は、人類史の上で見落とすことのできない画期的な出来事であることを忘れてはならない。

イギリス教育技能省も 2002 年、国家言語教育改革計画「外国語の学習：全ての国民が、生涯を通して」(The National Languages Strategy for England ‘Languages for All: Languages for Life’) を発表して、2012 年までに、7 歳以上のすべての児童・生徒に少なくとも 1 外国語を学ばせ、さらにそれを社会人にまで及ぼそうという思い切った政策を打ち出した。

2. 3 度の敗戦とアメリカ人

今日、「英語帝国主義」の牙城とさえみられるアメリカでも、異言語・異文化理解のための教育は、われわれの想像をはるかに超える規模で行われるようになったことを見落としてはならない。実は、アメリカもまた第二次世界大戦後、3 度の対外戦争の敗戦を経験している。

前大戦後、文字通りの超大国であったアメリカが、思いもかけない敗北を喫したのがソ連との宇宙開発戦争であった。1957 年、人類初の人工衛星を打ち上げたのは、世界の大方の予想に反して、アメリカではなくてソ連であった。ソ連の科学・技術に後れをとったアメリカは、早速、翌 1958 年に国家防衛教育法 (NDEA) を制定して、理数科教育のみならず、外国語教育の改革にも国をあげて乗り出した。これは、とりもなおさず、文化創造の担い手としての言語の役割に着目したものである。一民族の精

主要46か国・地域の外国語学習状況（小学校および中学校）

(2015年11月1日)

※・①、②、③、④はそれぞれ第1、2、3、4外国語

・それに続く数字は年齢

・「小3」は小学校3年、「中2」は中学校2年、「高1」は高等学校1年のように読む。

国・地域	国・地域内の主要言語	必修外国語数	学校外国語 〔配列は学習者の多いものから少ないものへ〕 〔オランダ語・イタリア語などの・印は両語〕 の学習者数がほぼ同じことを示す	※ 外国語学習開始の年齢・学年 (日本の学校に換算)
アルゼンチン	スペイン語	2	英語、フランス語、イタリア語、ドイツ語	① 8(歳) (小 3) ② 15 (高 1)
オーストラリア	英語	1	フランス語、ドイツ語、日本語、中国語・オランダ語・イタリア語・ロシア語・スペイン語、その他	① 8-10 (小3-小5)
オーストリア	ドイツ語	1-2	英語、フランス語、イタリア語、ロシア語、ラテン語、その他	① 6 (小 1) ② 10 (小 5)
ベルギー	フラマン(オランダ)語	2-3	フランス語、オランダ語、英語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、アラビア語	① 6-8 (小1-小3) ② 10 (小 5) ③ 12 (中 1)
ブラジル	ポルトガル語	1	英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語	① 12 (中 1)
カナダ	英語	1	フランス語、英語、スペイン語、ドイツ語、イタリア語	① 10 (小 5)
中国	中国語	1	英語、日本語、フランス語、ドイツ語、ロシア語・スペイン語	① 6-8 (小1-小3) ② 12 (中1) 選択
キプロス	ギリシア語	2	英語、フランス語、ドイツ語	① 9 (小 4) ② 12 (中 1)
チェコ	チェコ語	2	英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語、イタリア語	① 8 (小 3) ② 11-12 (小6-中1)
デンマーク	デンマーク語	3	英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ロシア語、日本語	① 7-8 (小2-小3) ② 12 (中 1) ③ 13 (中 2)
エジプト	アラビア語	2	英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語	① 11 (小 6) ② 15 (高 1)
フィンランド	フィンランド語	2	スウェーデン語またはフィンランド語、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、その他	① 6-8 (小1-小3) ② 9 (小 4)
フランス	フランス語	2-3	英語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、イタリア語、オランダ語、ポルトガル語、アラビア語、その他	① 6-7 (小1-小2) ② 11 (小 6) ③ 13 (中 2)
ドイツ	ドイツ語	2-3	英語、フランス語、ラテン語、オランダ語、スペイン語、イタリア語、ロシア語、その他	① 6 (小 1) ② 10 (小 5) ③ 12 (中 1)
イギリス	英語	1-2	フランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、ロシア語、その他	① 8 (小 3) ② 11 (小 6)
ギリシア	ギリシア語	2	英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語	① 8.5 (小 3) ② 10.5 (小 5)
香港	中国語	1	英語、フランス語、ドイツ語、日本語、スペイン語	① 6 (小 1)
ハンガリー	ハンガリー語	2	英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、イタリア語、スペイン語	① 9 (小 4) ② 14 (中 3)
アイスランド	アイスランド語	4	デンマーク語、英語、ドイツ語、フランス語	① 10 (小 5) ② 11 (小 6) ③ 14 (中 3) ④ 17 (高 3)

インド	ヒンディー語	2	英語、ドイツ語、フランス語、オランダ語、アラビア語、日本語、中国語	① 8-12 (小3-中1) ② 8-12 (小3-中1)
インドネシア	ジャワ語	2	英語、ドイツ語、フランス語、オランダ語、アラビア語、日本語、中国語	① 9 (小 4) ② 15 (高 1)
イラン	ペルシア語	1	アラビア語、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語	① 11 (小 5)
アイルランド	英語	1-2	アイルランド語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、イタリア語	① 6 (小 1) ② 10-11 (小5-小6)
イスラエル	ヘブライ語	2	英語、フランス語、アラビア語、ヘブライ語	① 8 (小 3) ② 11 (小 6)
イタリア	イタリア語	1-2	英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ラテン語	① 6 (小 1) ② 10 (小 5)
日本	三本語	1	英語 (中国語・朝鮮語・フランス語・ドイツ語)	① 10 (小 5)
韓国	朝鮮語	2	英語、日本語、ドイツ語、フランス語、中国語、スペイン語、ロシア語、アラビア語	① 6-8 (小1-小3) ② 15-15 (中1-高1)
ルクセンブルク	ルクセンブルク語	4	ドイツ語、フランス語、英語、スペイン語、イタリア語、オランダ語	① 6 (小 1) ② 7 (小 2) ③ 13 (中 2) ④ 15 (高 1)
マレーシア	マレー語	1	英語、中国語、タミール語、フランス語、ドイツ語、日本語、アラビア語	① 6-9 (小1-小4) ② 12 (中1) 選択
オランダ	オランダ語	3	英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ポルトガル語、イタリア語、ロシア語、アラビア語、その他	① 6-10 (小1-小5) ② 12-13 (中1-中2) ③ 12-14 (中1-中3)
ニュージーランド	英語	0	フランス語、日本語、スペイン語、ドイツ語、中国語	① 12 (中 1)
北朝鮮	朝鮮語	1	英語、中国語、日本語	① 8 (小 3)
ノルウェー	ノルウェー語	3	英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語、フィンランド語	① 6 (小 1) ② 13 (中 2) ③ 16 (高 2)
フィリピン	フィリピン語	1	英語	① 6 (小 1)
ポーランド	ポーランド語	2	英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語	① 6-9 (小1-小4) ② 9-14 (小4-中3)
ポルトガル	ポルトガル語	2	英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語	① 6 (小 1) ② 12 (中 1)
ロシア	ロシア語	1-2	英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、ヒンディー語、その他	① 6-7 (小1-小2) ② 12 (中 1)
シンガポール	中国語	1	英語、中国語、マレー語、タミール語、日本語、ドイツ語、フランス語、アラビア語、スペイン語	① 6 (小 1) ② 12 (中 1) 選択
南アフリカ	アフリカンス語	2	英語、アラビア語、フランス語、ドイツ語、ギリシア語、その他	① 6 (小 1) ② 8 (小 3)
スペイン	スペイン語	2	英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、ポルトガル語、アラビア語	① 6 (小 1) ② 10 (小 5)
スウェーデン	スウェーデン語	3	英語、ドイツ語、フランス語、フィンランド語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、ロシア語、中国語、その他	① 6-8 (小1-小3) ② 12 (中 1) ③ 13 (中 2)
スイス	ドイツ語	2-3	英語、フランス語、イタリア語、ロシア語、スペイン語	① 6-8 (小1-小3) ② 10 (小 5) ③ 13-15 (中2-高1)
台湾	中国語	1-2	英語、日本語、フランス語、ドイツ語、スペイン語	① 6-8 (小1-小3) ② 14 (中 3)
タイ	タイ語	2	英語、中国語、フランス語、日本語、ドイツ語、アラビア語、スペイン語、イタリア語	① 6 (小 1) ② 15 (高 1)
トルコ	トルコ語	1	英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、イタリア語	① 12 (中 1)
アメリカ	英語	0-1	スペイン語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、イタリア語、日本語、その他	① 12 (中 1)

—調査・作成：大谷泰照—

Wars and Language Education
— The Lessons the Twentieth Century Holds for Us —

Yasuteru OTANI

The problem of linguistic isolation often coincides with cultural isolation. And wars in the Twentieth Century have taught us that cultural isolation is a luxury we can no longer afford.

This paper is to examine the history and status of our cultural awareness frequently overlooked among us. This leads to a reconsideration of popularly held beliefs about language education in this country.